

昔を語る

鈴木 陽一

私が神大に赴任したのは1982年であった。現在の野球部合宿所がある場所の一角に、棟続きの二軒長屋があり、そこに一年住むことになった。目の前が現在の弓道場で、当時そこには学生寮があったが、自治会を名乗る連中に占拠されていた。6月のある日だったと思うが、朝からえらく騒がしいので外を見たら、機動隊がやってきて学生を排除しているところだった。この時点で、ようやく神奈川大学は「紛争」状態から抜け出すことになったらしい。

故人となられた山口建治先生に続いて、私は一般教養の中国語担当として、他の外国語の教員とともに予算の申請や執行を行う教員グループの一員となった。このグループには適当な名称がなかったらしく、「DFCR」と呼ばれていた。

さて、しばらくすると、あちこちで改革論議が行われていることに気がついた。大学進学率の高まりとともに、大学はそろそろ第二次ベビーブームを迎えるようとしていたため、特に私学では経営の安定のために何とか定員を増やそうとしていた。しかし、そもそも「大学紛争」が授業料値上げや、劣悪な教育環境に起因していたため、学部学科の組織改革や施設設備の改善などが求められていたから、定員増は容易ではなかった。さらに、首都圏への人口集中を避けるため、中心地域には教室の増設も禁止されていたことから、文科省の指導に従って、多くの大学では郊外に新キャンパ

スを設置し、新学部・学科を設立するという方策を探った。これがどのような結果になったかは若い先生方でもご存知だろう。見事に失敗したのである。

神大でも何とか改革をという声があったが、「紛争」が長引き、授業料の値上げができず、財政的にも厳しい状況にあって、具体化は容易ではなかったと聞いていた。そして最後に、二学科しかなく、一般教養科目担当の教員が多数を占める外国語学部に白羽の矢が立ち、84年くらいから改革検討委員会が設けられ、議論が始まった。私の属するDFCRでは、言語と文化の多様性を活かした「国際言語文化学科」を委員会に提案したが、一蹴され、理事長と学部長の意向ということで、中国語学科に決まった。60年代外国語学部設置後に、独、仏、中各国語の学科設置が構想されていたこと、当時すでに日中友好ブームが始まっていたこと、全国的に中国語履修者が急速に増えていたことから、改革委員会に諮る前から中国語学科を設立することは決まっていたようだ。山口先生も私も蚊帳の外だったのだ。

85年に設置準備委員会が設けられ、議論が始まることになった。事務局長から山口先生と私は呼び出され、設置準備委員会に加えてあげますと申し渡された。どうせ我々二人は数の内に入っていないのだろうと思い、「入りません」と言おうかと二人で相談したものの、理事会の手でヘンテコな学科を作られては困ると思い、しぶしぶ参加した。

入って驚いたのが、学科の中身も人事もほとんど空白だったことだ。決まっていたのは、定員が一学年 50 名（実質 60 名）であることと、当時の常務理事、経済学部の丹羽先生が東大の小島晋治先生の朋友であることから、小島先生が来られることだけだった。あとはお前たち二人でやれというのが、設置準備委員会の指示だったのである。

そこで、まず山口先生と相談したのが、学科の基本コンセプトをどうす

るかであった。これは簡単に結論が出た。すでに存在していた英語・英文とスペイン語の二学科はいずれも、外国語の習得と文化（文学、歴史）の学習の両方に重心を置いていたこと、当時の日中関係は極めて限定されたもので、経済交流もごく一部にとどまり、旅行ですら自由にはできなかつたこと、そのため中国に関心を持つ学生は多くが文学、歴史に興味を持っていたことから、中国語学科も中国語と中国文化（文学、歴史）の双方に配慮した学科とすることにしたのだ。

その後は、何となくではあるが、人事の構想と水面下の交渉は山口先生、カリキュラムや時間割も含めた書類作りは私という役割分担になった。私が人事で働いたのは、当時富山大学におられた佐藤進先生に、同窓のよしみで来て頂いたことだけである。佐藤先生はすでに都立大学への転任が決まっていたにもかかわらず、転任を先延ばしにしてこちらの希望を受け入れられ、本学に来て頂くことになったため、先生の師であり、私にとっても恩師と言うべき慶谷先生にやんわりとお叱りを受けたことを思い出す。

人事における山口先生の働きはめざましく、東大の東洋文化研究所におられ、所長も勤められた尾上兼英先生に来て頂くことを御承諾頂いた。また、当時北九州大学におられた那須清先生に来て頂くこともすんなり決まった。学科の学生定員と教員数の関係は、学生30人から99人までは最小限教員6人が必要とのことであったので、尾上、小島、佐藤、那須の教授陣、それに山口先生と私とで数は足りることになった。いや、数だけではなく、当時全国で相次いで設立された中国関係の学科の中でも、誇るべき陣容であったと思う。しかし、80年代に入ってから中国語履修者は毎年増加し、非常勤をお願いするのも容易ではなくなっていた。そのため、学科の専修科目と教養の中国語を共にカバーするという条件で、本来教養の中国語を担当していた山口、鈴木の二人の枠をそのまま残してもらい、6+2を教員定員とすることを設置準備委員会に提案した。すると学長と

事務局長から、学科の中国語の授業を1クラス（名目50人、実質60人）でやれば、専任6人でまかなえるだろうという提案があった。そこで、山口先生と私は、生物を専門とする学長が使用している実験室を訪問し、そのような無謀なプランではとても真っ当な教育を行えない、我々はこれまでどおり教養の中国語でかまわないので、設置準備委員会を降りると直談判し、8人枠を確保した。このことが、日中関係最悪の中でも中国語学科を維持し続けることができた一つの大きな理由となったと思う。そして、+2の人選に当たっては、もはや山口先生にも当てがなく、尾上先生、小島先生に推薦をお願いし、大里浩秋先生と吉川良和先生に来て頂くことになり、申請にも間に合わせることができるとホッとした。その際に、文科省への届け出とは無関係に、8人の教員の授業担当のコマ数と内容は完全に平等とすることとし、それが学科の伝統となった。

しかしながら、ことはそう単純には進まなかった。申請近くになって、事務から、大里、吉川両先生が教養の中国語担当であることが分かるような持ちコマにしないと申請が認可されないおそれがあるという連絡があった。確かにこの時代には、教養の外国語担当の教員数にも枠があって、それを理由に指示されれば抵抗する術はなく、四年間は両先生に教養の中国語を中心に授業をして頂くという不愉快な思いを強いることとなった。

問題はこれだけではなかった。我々には急ぎ解決しなければならないいくつかの大きな問題があった。

第一に、定員の問題があった。先に述べたように、首都圏では学生定員の純増が認められる可能性はなく、どこかの学部・学科から定員を分けてもらうのが、実質上唯一の方法であった。しかし、第二次ベビーブームの到来を控え、神大のどの学部・学科でも、ある水準の入学者を確保することは十分可能であったため、海のものとも山のものとも分からぬ新設学科に定員を分けることには強い抵抗があったと聞く。最終的には経済学部

が協力してくれて解決したわけだが、それにはおそらく、理事会の強い支持があったと思われる。あるいは理事長と小島先生がともに旧制水戸高校の同窓であったという縁があったのかもしれない。

第二に、教室の不足である。ただでさえ足りない教室、そこへ少人数教育をうたう新たな学科ができる、しかし、教室の増設は認められない。そこで、新たに建物を建て、これを教室棟ではなく研究棟（!？）として申請し、認可された。それが20号館である。こうした方法で危機を凌いだ事務局の手腕にはひたすら感謝するのみである。

次に中国語を母語とする教員の確保が問題となった。当時の日本には、大陸で育ち、共通語に近い方言を母語とする中国人教員はほとんどおらず、中国語を母語としていても、台湾、あるいは東南アジア出身の教員が大半であった。これから先、学生達が社会で活躍する時代には中国との交流が盛んになる、学生達も中国の大学に留学に行く可能性が高くなっていく、そのためにはやはり今の中国で暮らした経験のある教員が望ましいということになった。また、現実の中国の人たちがどんな暮らしをしているのか、そういう情報も学生達に与えたいということで、これは尾上先生、小島先生が大学当局と交渉し、外国人特任教員の枠を確保し、直接中国から招請することを認めさせたのである。

次の問題は、ゼミと卒論をどうするかであった。当時、ゼミの必修は文系学部では未実施であったが、我々は当然のこととして、全員一致で必修と決定した。卒論も必修とすることでは一致したが、本当に全員に書かせることが可能であるかという点では自信が持てなかった。初修外国語の習得と、論文の執筆とは両立しないのではという懸念も強くあった。そこで、卒論必修、ただし講義科目の履修などで代替することができるという妥協案が考えられたが、代替を認めると、ほとんどの学生が卒論を書かないという情報が入った。そこで、最終的には「しんどくても何とか書かせよ

う」ということで現行の方式になった。ただし、現状を見ると、卒論の必修については再考すべき時期に来ている気がする。

申請が具体化していくにつれて、他大学の中国関係の学科の様子（構想）が見えはじめた。その結果、我々が実現したのは、中国における中国語研修であった。単位を金で売るのかという批判もあったが、当時中国への旅行は依然として不自由であり、特に個人での旅行や研修は難しかったので、学生達には喜ばれ、多いときには一学年の三分の二の学生が参加したこともあった。このプログラムが90年代前半の、中国語学科の受験生の確保にはかなり貢献したものと思う。

なお、学科が動き出してからのことではあるが、問題になったのは、神大が国際交流では完全に後れをとり、相互学費免除による交換留学が可能な大学が一校もなかったことである。尾上先生が北京外語大に設けられていた「日本学研究センター（国際交流基金によって運営される組織）」の日本側責任者となり、いくつかの大学と交渉された結果、特に杭州大学（現浙江大学、浙江工商大学）とは時代の先駆けとなる学術交流を実現したもの、学生に直接還元されるような国際交流は21世紀になってからのことであった。

その後、いや学科設立の直後の89年の天安門事件以後、日中関係は次第に悪化していった。たしかに、経済の相互依存は高まり、中国人の日本文化への関心は高まっていたが、特に尖閣諸島問題などで政府間の関係が悪化するにつれて、日本人の「嫌中」感は急速に膨れ上がり、中国語の履修者は年々減少し、全国の少なからぬ中国関係の学科は、定員減や模様替えで何とか急場を凌ぐよりなくなっていました。しかし、神大の中国語学科がこうした弥縫策をせずに危機を乗り越えられたのは、学科設立当時からの、教員と学生達による取り組みの成果としての有形無形の「資産」があったからだと思う。別の言い方をすれば、大学の内外で、中国語学科の研

究活動（学会の全国大会や国際シンポの開催、科研費の取得、COEへの参加）や教育への意欲的取り組み（徹底した少人数教育、ITの活用、小品コンテストなどのアクティブラーニング）に対して高い評価が与えられ、社会的にも信用ができあがっていたからだと思っている。

さて、紙幅を大分使ってしまった。後は二つのことを追記しておきたい。

一つは大学院の教育の成果である。学科設立から3年程経って、大学院設立の可否について議論をした時、神大の中国語学科は学部教育に重点を置くべきであるということで意見が一致した。しかし、尾上、小島両先生から、大学院を持たない大学、学部・学科は、今後大学の名に値しない組織として軽んじられるおそれがある、だから重点を学部教育に置くにせよ、大学院は設置すべきであるという忠告があった。そこで、やむなく大学院を設置したと言うのが実情であった。しかし、その後松村先生が、加藤先生をはじめとして何人の博士を育て上げ、彼らの多くが研究職を得たことにより、大きく風向きが変わった。現在では、松村先生以外の教員の元でも博士号を得て研究職についたものが何人も出ている。こうした流れがいつまで続くか分からぬが、神大中国語学科の危機的状況を乗り越える上で大学院教育の成果が果たした役割をきちんと評価し、これまでの成果を是とするのであれば、困難があっても何とか大学院を維持すべきだと思う。

二つ目は、学生達のための国際交流である。これについては、伊藤文保元理事長と中島三千男元学長の努力によって大いに前進したことを強調しておきたい。学科設立以後、尾上、小島両先生をはじめ優秀な教員スタッフの努力によって、学術交流は大いに発展した。しかし、遺憾ながら、神大が国際交流のための宿舎をほとんど所有していないかったこと、留学に行く学生を支援する制度がなく、むしろ行かせないような制度であったこと、留学に行く、或いは来る学生の為の経済的援助がなかったこと、こうした

理由で、教員間の学術交流が学生達の留学などにつながらなかったのである。しかし2008年の秋から冬にかけて理事会は決断をした。制度改革を進めつつ、まずは近隣の古いアパートの借り上げから始まり、大型の社宅の借り上げ、そしてANAの職員宿舎の買い上げと、最大のネックであった宿舎問題を解決した。また奨学金の創設も、経済的に厳しい状況にある学生にとっては大きな助けとなったと思う。その成果として、復旦大学を皮切りに、多数の名門大学と交換留学を実現することができた。しかし、残念ながら、今日全般的に日本の学生が著しく内向的になっていること、日本とアジア諸国との関係が改善しないこと、また少なからぬ国での社会状況も不安定なことから、折角のチャンスがありながら、学生たちが留学には余り積極的ではないようで、これが現在唯一の気がかりだ。

さて、人の縁に恵まれ、神大の内外において多くの人の支援を受けることで、非才ながらも定年までやってくることができた。お世話になった恩師、先輩、友人、学生の皆様に篤く感謝するとともに、学科設立時からお付き合いを頂いている諸先生、就中亡くなられた山口建治先生と、学科立ち上げから退職まで水面下でサポートしてくれた事務局の諸君に、心から御礼を申し上げたい。

21世紀になる辺りから、確かに大学のいわゆる行政に関わってきて、忙しい思いも、辛い思いもしたが、その仕事の最中に、幸運にも多くの尊敬する学者たちの知遇を得たことは大いなる喜びであった。しかも、今回もそうした方々が、お忙しい中を論文や随筆を寄稿してくださったことはさらなる喜びであり、深く感謝申し上げる。同時に、この文集の刊行によって、諸先生と神奈川大学中国語学科との些かの縁を結ぶことによって、皆様への、ささやかな恩返しとなっていれば、これに勝る幸いはない。

末尾ながら、本論集の編集に当たられた、松浦学科主任、孫先生、彭先生に御礼申し上げる。同時に、私事ながら、心筋梗塞に倒れて長期入院し、

その後も心不全で入院するなど健康面での不安を抱えながら仕事を続けてきた私を支えてくれた家族に感謝する。

皆様、長い間、有り難うございました。

2021年5月吉日

附記

本文では、私の研究について全く触れておりません。幸せなことに、何人かの先生方が私の研究についてご紹介を頂いておりますし、特に神大中国語学科と中国の諸大学を学術研究の面で結びつける役割を果たした中国古典小説研究会と私との関わりについては、畏友大塚秀高先生、大木康先生がそれぞれ一文を草しておられますので、そちらをご覧下さるようお願い申し上げます。なお、退職記念ということで、過褒のお言葉があるかのように側聞しておりますが、それは諸先生の御厚情によるものということで、実像との違いについてはご勘弁下さい。

2008年以降学内行政に関わり、複数回入院するなど体調も万全ではありませんでしたが、研究への夢は捨て難く、論文を書き続けました。しかし、その結果できあがった数点の論文は甚だ不十分なものであり、大幅に加筆訂正を行う予定で準備を始めております。修正稿ができましたら、年内には以前に執筆した杭州、西湖に関するものと併せて私家版の論文集を作成するつもりでおります。完成後に、御笑覧の上、御教示、御叱正頂ければこれに勝る幸いはございません。